

柳内たくみ 著  
Yanai Takumi

# ゲート

GATE  
SEASON 2

自衛隊 彼の海にて、斯く戦えり

## 2. 謀濤編

GATE SEASON 2:2 A SURGE OF STRATAGEMS

## その他の登場人物

- 黒川雅也 ..... 海自潜水艦「きたしお」艦長。  
黒川茉莉 ..... 二等陸尉。中央病院勤務の看護師。  
シェリー  
ノーム・デュエリ ..... 伯爵令嬢。菅原家に寄宿している。  
菅原浩治 ..... 日本の外務官僚。ロリコン。  
北条宗祇 ..... 北条元総理の息子。若手政治家。  
望月紀子 ..... かつて帝国に拉致されていた女性。  
シャムロック・  
ハ・エリックシール ..... ティナエ「十人委員会」の一人。  
イスラ・デビノス ..... シャムロックの秘書。



### オデット・ ゼ・ネヴュラ

翼皇種の少女。  
戦艦オデット号の船守り。  
プリメーラの親友。

### エドモンド・チャン

特地碧海で行方不明となった  
華人系米国籍ジャーナリスト。

### 江田島五郎

海上自衛隊一等海佐。情報  
業務群・特地担当統括官と  
して長く特地に駐在してい  
る。生粋の“艦”マニア。

## 主な登場人物

### オー・ド・ヴィ

ティナエ諜報機関「黒い手」  
諜報員。現在はプリメーラ  
の侍従。

### メイベル・フーン

「黒い奴」との戦いに敗れ、  
神に見捨てられた巫神。徳島  
の下で暮らしている。

### シュラ・ノ・アーチ

帆船アーチ号船長。  
正義の海賊アーチ族の  
血を引く。プリメーラの親友。

### プリメーラ・ ルナ・アヴィオン

「碧海の美しき宝珠ティナエ」  
統領の娘。「酔姫」の異名を  
持つ。亡国アヴィオン王家の  
血を引く。

### 徳島甫

海上自衛隊二等海曹。  
優秀な給養員。現在は江田  
島統括官付きとして特地の  
調査任務にあたる。

特地アルヌス周辺

●ロンデル

●帝都

●イタリカ

○アルヌス

碧海

エルベ藩王国

グラス半島

トユマレン

アヴィオン海

碧海



# アヴィオン海周辺



## 序

特別地域／アヴィオン海／北緯二八度二〇分・東経一四度五八分  
ロンデル標準時一八四四時――

特地アヴィオン海の怪物『鰐鯨』の群れの襲撃により、下腿を失ったオデット・ゼ・ネヴェュラは、突如浮上した海上自衛隊特地派遣潜水艦隊所属『きたしお』に収容された。

潜水艦の通路は人間一人がなんとか通れる程度の横幅しかない。

誰かと行き会ったら身体を横にしてようやくすれ違えるほどだ。

白い翼人の娘を抱きかかえた海上自衛隊二等海曹、徳島甫は叫ぶ。

「通路を空けてくれ！」

「お、おうっ！」

女の子一人抱きかかえてはなおのこと通りづらい。だが、臍すねから下を失ったオデットの姿を見た乗組員達は、潜航準備で忙しいというのに逃げるようにして道を空けてくれた。さらにゴムシートを敷き詰めた床に点々と落ちた彼女の血液を掃布ソフ（モップ）で拭くことすらしてくれたのだ。

「先生！」

士官食堂は緊急時には手術室となる。全ての支度は連絡が入った段階で衛生員の手で済まされており、医官の湊みなと三等海佐が患者を待っていた。

しかしオデットの姿を診た瞬間、湊三佐は盛大に舌打ちした。

「両下肢りょうかじのギロチン式切断なんて聞いてないぞ！ しかもこの娘、翼背負すねってるじゃないか!？」

「何か問題があるんですか？ 翼皇種アヅイだと治療できないとか？」

オデットを治療台に横たわらせた徳島の問いに、湊は答えた。

「骨の作りが微妙に違うんだそうだ。どれどれ……患部の両下肢断端だんだんからは頸骨けいこつ、腓骨ひこが見えて、それを包むように下腿の筋肉、その隙間からは前頸骨動脈、深腓骨神経、頸骨動脈、後頸骨動脈、頸骨神経等々が見える……患部については俺達と全く同じだな。なら、やることも同じでいいってことか。それじゃラインの確保と輸液せいよく！ 生食せいしょくのパックをこっそり持ってこい。それと誰か艦長にこのまま手術すると伝える！ 麻醉ますいをするぞ！」

その言葉を合図に、医官の助手でもある衛生員が弾かれたように仕事にとりかかった。

まず止血に使っていたロープを外して床に捨てるとカフ式ターニケットで脚の血流を抑える。

医官は傍らに突っ立ってオデットの傷口に見入っていた徳島に命じた。

「おい、徳島。ぼやっとしとらんで今の時間をそこの壁に書け！」

「は、はい？」

「ターニケットで止血した時間だ。定期的に血を通わせないと組織が壊死えししてしまうからそれを防ぐための記録だ。分単位で正確にな！」

「は、はこ」

徳島は言われるままにグリスペンを取ると、士官食堂の壁に「止血開始1848」と大書する。慌てて書いたせいか、酷く形の歪んだ字になってしまった。

「徳島、この娘に何かあった？ 機械か何かに巻き込まれたのか？ それともサメにでも食いつかれたのか？」

「サメみたいなもんです。海に引きずり込まれるかどうかの瀬戸際で、斬るしか仕方がなくなってる」  
徳島は、重苦しい表情で腰の骨裁クリパーち鉞いに軽く右手をあてる。そして鞘の中で包丁がカタカタと音を立てたことようやく気付いた。手が震えているのだ。壁に書いた字が歪んだのも、この震えのせいだった。

もちろん理由は分かっている。オデットを二度と歩けない身体にしまったからだ。それしか方法がなかったのだから仕方がない。仕方がなかったと自分に言い聞かせてはいるが、

骨<sup>ククリ</sup>裁<sup>バ</sup>ち鉈<sup>バ</sup>を振り下ろした瞬間のゴリツという骨を断つ感触は嫌でも手に残っていた。そしてその時の彼女の悲鳴も、耳に残って消えない。正しいからといって何も感じない訳ではないのだ。しかし医官は言い放った。

「よくやった、お前は最善を尽くした！ 後はこっちで何とかしてやる。命だけだがな！」

衛生員が生食——生理食塩水のパックを抱えられるだけ持つてくると医官は早速手を伸ばした。

「こっちにも生食のパックを一個よこせ」

「は、は」

医官は衛生員から受け取った生理食塩水のパックに、鉈<sup>はき</sup>を突き立てる。そしてオデットの足に浴びせて臍<sup>へそ</sup>の断端を洗い始めた。

どぼどぼと傷口に生食をかけていくと、どす黒く固まった血で汚れた彼女の患部が洗われ、その下から鮮やかな薄桃色をした肉と白い骨が姿を現す。

徳島は思わず目を背けた。

「くっ……」

職業柄、肉だの骨だのには慣れているはずなのに、それがよく見知った人物のものであると思うと疑似的な痛みに襲われてしまうのだ。

「おい徳島、お前はもういい。科員食堂にでも引ッ込んでろ」

医官はアンブルに注射器を刺し、薬剤を吸わせながら言った。

「でも、やったのは俺ですし。何か手伝えることがあるなら……」

「お前、この娘と親しいんだろ？ それじゃ何も出来んよ。ここで役に立つには生きた人間をメスで切って、針で刺して、ヤスリで骨を削って、糸で縫<sup>ぬ</sup>う……そんな残酷なことを平気な顔でこなせる奴だけだ。この娘を心配する気持ちは理解できる。だが、それは別の時、別の場所で満たすんだ。ここから先は俺達に任せておけ。いいな？」

そう言われると否も応もない。徳島に出来ることは本当に何もないのである。

その間にも、湊医官はオデットを側<sup>そく</sup>臥<sup>が</sup>位<sup>い</sup>にさせる。そして徳島の存在などもう忘れてしまったかのように、オデットの背中を丸めさせ腰骨の隙間に刺さるよう麻酔の針を突き立てた。

「あ、後をよろしく願います」

返事すらない。

「麻酔完了！ 直<sup>ただ</sup>ちにオペを開始するぞ」

忙しく立ち働く医官達の様子に後ろ髪を引かれながら、徳島は重い足取りで士官食堂を出たのだった。

徳島は梯子<sup>はしこ</sup>段<sup>だん</sup>を降りると科員食堂へ向かった。

見ると短艇から収容されたブリメラ達がテーブルを囲んでいた。

科員食堂には詰めれば六人座れるテーブルと四人座れるテーブルが、艦<sup>かん</sup>首<sup>しゅ</sup>側<sup>がわ</sup>と艦<sup>かん</sup>尾<sup>び</sup>側<sup>がわ</sup>、二列に並

べられている。皆は、その艦尾側——調理室寄りのテーブルに身を寄せて座っていた。

与えられた毛布に身を包み、一言も口を利くことなく静かにしている様子は、まるでお通夜のようですらあった。

だがそれも無理のない話だ。自分の乗っていた船が沈没し、海に転落したり、溺死しかけたりした。その上、鯨の群れに襲われ他の乗組員達が次々と食われていくところを目のあたりにしたのだから。助かった喜びを味わうよりも先に、放心してしまうのも当然だった。

例外なのは、艦首側のテーブルでアクアスの人魚達と話し込んでいる一等海佐江田島五郎、そして徳島自身くらいだろう。だが徳島やその上司の江田島とて、多くの犠牲が出たことに何も感じていない訳ではない。ただ、今は成さなければならぬことがあるから、それを優先しているだけなのである。

今、徳島がしなければならぬこと。

その一つが救出作戦の目標であった米国籍ジャーナリストの監視だった。そもそも徳島と江田島はこの男の身柄を確保するためにアヴィオン海まで出張ってきたのだ。

華人系米国籍ジャーナリストのエドモンド・チャンは、四人テーブルの調理場側に座り、どこか傍観者めいた余裕の態度で日本の潜水艦の様子を興味深げに見渡している。

セーラー服の上衣をまとった人魚達に強い関心を抱いているらしく、江田島とケミイ達の会話に聞き耳を立てて何度も視線を送っていた。江田島もそれを意識しているのか何でもないようなこと

ばかりを話題にしている。

次いですべきことは、収容された特地人の状態確認だ。

徳島はプリメーラへ目を向ける。

『碧海の美しき宝珠ティナエ』の統領の娘にして、旧アヴィオン王国王族の末裔たる彼女は、ピンク色の髪をたくし上げると隣のアマレットに上体を預け、市場に並んだ魚のような眼差しを中空に漂わせていた。

衣服が濡れて冷えているせいか、あるいは繰り返して襲ってきた命の危機のせいか、青みがかつた唇を小刻みに震わせている。そして潮者用に用意されたブランデーの入ったカップを両手で抱え、チビチビ舐めるように飲んでいく。

その隣で彼女を支えるアマレットは、プリメーラ付きの主任メイドだ。

主の隣に座り甲斐甲斐しくも乾いたタオルで髪を拭いてあげている。だがそうやって一心不乱に役目を果たそうとしている姿は、自分の役割に没入することで不安や恐怖から目を背けているように見えなくもなかった。

一方、ティナエ海軍所属オデット号艦長のシユラ・ノ・アーチは、プリメーラの正面でテーブルに肘を突きじつと頭を抱えていた。

徳島に背を向けて座っているため表情こそ分らないが、その丸まった背中からは、艦長として指揮を執っていた船と乗組員を失った罪の意識に必死になって耐えている様子が窺えた。

プリメーラの侍従にして、ティナエ共和国の防護機関『黒い手』の一員でもある少年オー・ド・ヴィは、チャンと向かい合う席に座っていた。

この得体の知れない潜水艦と称する船と、見慣れない設備に囲まれて神経を高ぶらせている様子だ。これだけの船をいつの間にティナエ近海まで進出させたのか。それを成し得た日本という国に対する警戒心が掻き立てられているのかもしれない。

「あ、司厨長」

そんなオー・ド・ヴィが徳島の姿を認めて声を上げた。

『司厨長』とは、沈んだティナエ海軍オデット号における徳島の役職だった。いろいろな事情と経緯と目的により身分を隠して船に乗り込んだ徳島は、やれることをやっていた結果いつの間にかそういうことになっていた。

そしてそれは江田島も同じであった。オデット号の副長となり、若いシユラが艦長の職務を遂行するのを補佐する立場になっていたのだ。

ヴィの呼びかけに反応して、シユラが反射的に立ち上がる。

「ト、トクシマ司厨長！ オディは？ まさか……」

その時、徳島のティナエ海軍仕様の船員服はオデットの流した血で真っ赤に染まっていた。士官食堂で止血帯代わりのロープを解いた際、オデットの傷口から溢れた出血を浴びてしまったのだ。

その鮮烈な赤を見たシユラは、最悪の事態を予想したのか表情を険しくする。

「今、手術中です。医師が診てくれます」

徳島はシユラが安心できるよう、出来る限り笑顔を作ってテーブルに歩み寄った。

「つまり、無事なんだね？」

「はい、医師は任せておくと請け合ってくれました」

シユラはホッと胸を撫で下ろす。

すると今度はプリメーラが念を押すように言った。

「本当に大丈夫なんですかね？」

「はい、大丈夫のほうです」

徳島は、プリメーラの強い視線に気圧されたように立ちすくんだ。

ブランドーが効いて、『酔姫』モードに入っているらしい。

この状態になると、親しい相手以外目を見て会話することも出来ないコミュ障娘から、ずけずけと思つたことを遠慮会釈なく口にする強気な姫になるのだ。

「何をへらへらと笑っているのですか？ 貴方のしたことでしょう！」

「は……はこ」

罪悪感を強く刺激された徳島は、申し訳なさに項垂れる。

徳島は、断じてプリメーラが言うようにへらへら笑ったのではない。ただ彼女達を安心させた

かつただけなのだ。

しかしプリメーラは徳島の表情を不真面目さの表れと受け止めた。徳島を批難する瞳は罪人を必ず罰してやるという陰のある意思で輝いていた。

「もしあの娘に万が一のことがあったら、わたくしは貴方のことを絶対に許しません」

「……っ」

徳島は齒を食いしぼる。オデットの骨を断つ感触と、彼女の悲鳴がありありと蘇って身体が震えた。

だがその時、シュラが割って入りプリメーラを叱った。

「プリム！ そういうことは口にするものじゃない。司厨長だって好きでああした訳じゃないんだ。あの場では他に方法がなかった。仕方がなかったんだ」

「でも、あの娘はこれから生涯不自由を背負うのですよ！ もし司厨長がもつと優秀で、他の手立てを思い付いていたら、あの子の未来は台無しにならずに済んだのに」

だがシュラは頭を振った。

「他に方法はなかった！ 誰であつても彼女の脚を切り落とすことしか出来なかった。もしボクがあの場合にいたとしてもそうしていた。だからプリム、君は司厨長を詰るべきではないんだ。逆に感謝すべきなんだよ。あの時、あの瞬間、司厨長が少しでも躊躇っていたらオデットは命を失っていたんだからね」

「でも！ あの子はまだ二度と心から笑うことが出来なくなってしまうました！」

「どうしてそう決めつけるのさ？ 生きてさえいれば笑うことなんていくらでも出来る」

「どうやって？ どうやってこれから人並みの幸せを手に入ればいいんですか？ 身体が不自由になつてしまったあの娘は、もう船守りとして働き続けることは出来ないでしょう。恋をして誰かの妻になることも難しい。子を生なして育てることだって大きく制限されます。それでどうして屈託なく笑うことが出来るの？ あの子の綺麗な笑顔がもう見られなくなってしまうと思うと、わたくしは、わたくしは……」

プリメーラはそう言うと、こみ上げてくる悲しみを堪えるように口を手で覆い顔を伏せた。

だがシュラはプリメーラの両肩に手を添えて言い聞かせる。

「君の言いたいことはよく分かるよ。オデットが心配なんだね。けど、それは司厨長の責任ではないよ、プリム。そこだけは履き違えたらダメなんだ」

「でも、オデイの足に骨裁ケリち鉈ノバを振り下ろしたのは司厨長なんですよ！」

するとシュラは目をすつと細めた。

「分かった。よく分かった。君がそのつもりなら、ボクもこの際だからはっきり言わせてもらおうよ。君が司厨長を詰るのはね、責任転嫁したいからだだよ！」

「せ、責任転嫁ですって？」

「そう、君は責任を感じてるんだ。そもそも自分がシーラーフ侯爵公子を探したいなんて言い出さ

なければ、こんなことは起きなかつたよね！」

「シュ、シユラ、こうなったのはわたくしのせいだとおっしゃるつもりなの？」

「まさか！ ボクがそんなこと思うはずがないよ。そもそも船で起こる全てのことは艦長であるボクの責任なんだからね。だから、オデットの身に起きたことで詰られるなら、ボクであるべきなんだ。けど君自身が、他の誰でもない君こそが、全てを自分のせいだと感じてしまっている。でもその責任は一人ではとても背負いきれるもんじゃない。だから君は、オディを傷つけた罪だけはせめて誰かに着せたいんだ。司厨長はその誰かにされてしまっただけなんだ！」

「そ、そんなこと……」

「ない、と言ひ張れるかい？」

「……」

プリメーラはしばしシユラとの間で強い感情を込めた視線をぶつけ合う。だが、程なくして力なく視線を落とした。

「分かつてくれたみたいだね？ さあ、司厨長に謝るんだ」

だがプリメーラは頭を振った。

「嫌です。絶対に分かつてたりしません。謝りません」

そしてこの話題を続けることを拒むように、顔を伏せてしまった。

シユラは、頑なな態度をとるプリメーラを見て深々と嘆息した。そして仕方なさそうに徳島を振

り返る。

「すまないね、司厨長。本来はもつと聞き分けのいい娘んだけど……きつと疲れてるからだと思う。気が動転しているんだ。凄くね。元気を取り戻せば、この娘だつて君に責任がないことは分かるはずだ。だから悪く思わないであげて欲しい」

シユラに言われて徳島は大きく嘆息した。そして仕方ないことだと肩を竦める。

「大丈夫ですよ。何故姫様がこんな態度をとつたのかさえ分かっていたら我慢できますから」

するとシユラは、眼帯を着けていない左の<sup>まぶた</sup>瞼を驚いたように<sup>またた</sup>瞬かせ、ニヤリと笑った。

「へえ……」

その反応に今度は徳島が驚く。

「何か？」

「いや、君が許す許さないではなく、我慢と口にしたからさ。そうかそういうことなのか。だとするとプリムがこんな態度をとつた理由も分からないでもないかな」

「何を言ってるんです、艦長？」

意味が分からない。徳島はシユラの真意を確かめようと問いかけた。

だが答えを得る時間は与えられなかった。艦内に「<sup>せん</sup>潜航！ 潜航！」の号令とそれを復唱する声が行き交つたからだ。

「<sup>かんきょう</sup>艦橋ハッチ閉鎖！」

「艦橋閉鎖、空気出せ」

発令所で行き交うその号令とともに、密閉された艦内の空気圧が上がっていった。

艦内の気圧上昇は、艦内にいる全員に例外なく襲いかかった。

この気圧変化は人間の鼓膜に異常を生じさせる。

高速で走行する電車が長いトンネルに突入した時、あるいは高層階へ上がる高速エレベーターに乗っている時などに起こる耳の違和感がそれだ。

これは鼓膜を挟んだ体内外の気圧に差が生じ、気圧の低いほうに鼓膜が膨らむことで起こる現象である。この違和感は鼻と喉の奥、解剖学的には咽頭鼻部いんとうびぶと称する部位の耳管口じかんこうを開くことで解消されるのだ。

いわゆる『耳抜き』である。潜水員でもある徳島はこれを自在に出来るので無意識に解消していた。

徳島だけではない。潜水艦の乗組員はこうした気圧の変化に対応できることが必須の資質であるため全員が平然とした表情のままであった。

だが、期せずして潜水艦の乗客となったプリメーラやシュラ達は違った。

予告なく発生したこの現象に大いに戸惑い、不安に陥る。

顔を伏せていたプリメーラも、耳の違和感に頭を上げた。主の異変を見たアマレットは、皆が同

じような体験をしていると理解して声を上げる。

「な、なんか耳が変わす！」

「それは艦内の気圧が上がっているからです。唾を呑み込むと耳が通って楽になりますよ」

江田島が落ち着き払った口調で説明した。

「唾を？」

「そうです」

アマレットが唇をきゅつと閉じて唾を呑み下そうとする。

プリメーラもシュラも、チャンも揃って同様にしている。

すると程なく解消したようで、皆ホッとした顔つきをしていた。

だがオー・ド・ヴィだけは、いくら唾を呑み込んでも耳が通らないらしい。表情がどんどん険しくなっていく。高くなる空気圧に、耳の苦痛が耐えがたくなってきたようだ。

そこで徳島が他の方法を告げた。

「口をパカッと開いてもいい感じで抜けますよ。顎あごを左右にずらしてもいい」

するとオー・ド・ヴィは必死になって何度も何度も顎をしゃくった。そしてようやく空気が抜けたらしく、ホッとした表情を見せたのだった。

\* \* \*

「とめ！」

発令所の潜航指揮官が、突き出した右の掌をぎゅっと握った。手の合図を添えるのは噴出する空気音に紛れて号令が聞こえない時のためでもある。陸・海・空それぞれの戦闘組織が、独特の符丁、言い回しを用いるのは、爆音轟く戦場で命に関わる聞き間違いを防ぐための工夫なのである。

「とめ」

合図を受け潜航管制員が艦内を縦横に走るパイプについたハンドルを何回も回していく。次第に空気の流入音が静まり、やがて止まった。

「空気とめた！」

そしてしばらくしても艦内の空気圧が下がっていかない——つまり艦内が完全に密閉された状態である——ことを確認した潜航指揮官は哨戒長に告げた。

「閉鎖よし」

二番潜望鏡にとりついて艦の周囲三六〇度を確認していた哨戒長は、発令所の最後部で椅子に腰を掛けている艦長に告げる。

「艦長、危険な目標は潜望鏡視界内にありません。潜航します」

「了解」

黒川艦長が頷くと哨戒長が令ずる。

「潜航せよ！」

「ベント開け！」

大量の海水の流れこむ音が艦内に響く。メインタンクに海水が満ちていこうとしているのだ。それによって艦は浮力を少しずつ失い、海面下に潜り込んでいく。

「深さ一八、ダウン三度」

哨戒長から操舵員に、目標とすべき深度と姿勢角が指示される。

「ダウン三度」

操舵手の木内海士長が復唱して舵を押す。すると『きたしお』が前に傾いていった。

「ダウン三度。入り始めた」

黒い艦体が海面を切り裂いて水面下へと潜り込んでいく。艦首部分から、艦の中程、そして最後にセイル部分が海面下へと没していった。

「ベント閉め」

「ベント閉鎖」

「深さ一八。横舵中央！」

「艦長。ツリムよし」

発令所内で様々な命令と復唱が行き交い、艦体が海面下で安定したことを確認して一段落する。黒川は水測員に尋ねた。

「鯨鯨の群れの様子はどうか？」

『先ほどの襲撃で、鯨鯨S八九とS九〇が三一二度の方角に逃げて行きました。その後は遠方で鯨鯨進音がうるついでいます。びっくりして一目散に逃げていき、一息ついて何が起こったのか冷静に考えている……という感じですよ』

水測員、松橋二等海曹の返答は相変わらず分かりやすい。

黒川はそれを聞くとくすりと笑った。

「つまり落ち着いたら反撃してくるという訳だな。では、今のうちに深深度潜航してしまおう」

黒川が新たな命令を発すると、艦内では慌ただしく準備が進められていった。

「艦長、深深度潜航配置よし」

哨戒長の報告に黒川は頷いた。

「潜航！」

黒川が目指すべき深度と姿勢角を操舵手に告げる。

「深さ四〇〇、ダウン二〇度」

その時、黒川は医官が手術中であることを思い出して、艦の傾く角度を和らげるべきかと考えた。だが、湊医官であればこの程度の傾斜は問題にしないだろうと思いつけることにする。

「ダウン二〇！ ……深さ五〇、六〇、七〇……」

艦体が再び大きく前方に傾き、操舵手がメートル毎に深度を読み上げていく。

「二〇、二三……」

乗組員達はあちこちのバーや手すりに掴まり身体を支えていた。二〇度というのは何かに掴まらなくては立っているのが不安になる傾斜なのだ。

船殻の周囲をとりまくメインタンクへ流れこむ水音が、さらに艦内に響き渡る。水圧が増すとタンク内の空気が圧縮されて容積が減るため、浮力が倍々の勢いで減っていく。そして海水の猛烈な圧力を受けた艦体が時折シミシと音を立てるのである。

\* \* \*

「今、何が起きてるんだい？」

科員食堂では、シユラが皆を代表して状況の解説を江田島に求めた。

外の見えない船倉の奥深くに連れ込まれたと思ったら突然耳が痛くなり、テーブルにしがみつかなければならないほど船が傾いた。

さらには艦体がシミシと音まで立て始めたのである。

水がどンドン流れ込んでくる音は、船体が破れて海水が浸入してきているようにも感じられるか

ら鳥肌が立ってしまった。いくらこの船が海に潜れるものだと言われていても地獄に引きずり込まれるような不安と恐怖に駆られてしまうのである。

オデット号が沈んだばかりということもあって、とても楽観視できる状況ではなかった。「副長、報告。ボクは何が起きているか知る必要があるんだ。ボクにはみんなを守る義務があるんだからね」

プリメーラ、アマレット、オー・ド・ヴィが不安そうに、そしてチャンが興味深そうな表情で江田島の回答を待った。

シユラの言葉を聞き、自分が彼女を支える部下であったことを思い出した江田島は語り始めた。「とりあえず現状を申し上げますと、この艦は今、海の奥深くにまで潜ろうとしているのです」

慎重に言葉を選んでいるのが誰にでも分かる口ぶりだった。だが口にした言葉が嘘にならないようにする配慮そのものが不安を生んでしまう。

「深くってどのくらい？」

シユラはさらに問いかけた。

「かなり深く、としか申し上げられません」

「また浮かび上がれるのですよね？ 大丈夫なんですよね？」

アマレットが我慢しきれないといった表情で確約を求めた。

その時、アマレットの不安げな質問に被せるようにチャンが言った。

「おい、エダジマよ。そもそもこの潜水艦はどれくらい潜れるんだ？」

「実は深さ一万メートルまで行けます」

江田島は間髪容れずに答えた。

「い、一万だと？」

予想外の数字に目を丸くするチャン。だが江田島は真顔で頷いた。

「まさか、そんな……あり得ない」

「どうしてあり得ないと分かるのですか？ 我が国では、潜水艦がどこまで潜れるかは非常に重要な防秘であり誰にも開示されていないというのに。チャンさん、もしかして誰かから聞いたことがあるのですか？ もしよかつたらその誰かを教えていただけると嬉しいのですが」

江田島の執拗な追及にチャンは言葉を濁した。

「い、いや、取材源の秘匿はジャーナリストの義務だから言えるはずないだろ。それに本当に知らないんだ。知っていたら聞くはずがない」

そこまで口にして、チャンは江田島の真意を理解した。

潜水艦の可潜深度は国家機密なのだから教えられないはずがない。当然、江田島が本当のことを口にするはずもないのだ。

とはいえ江田島の言葉が嘘だとしても、それを嘘だと指摘できるのは真実を知っている場合に限られる。つまり一万という数値がたとえ与太話であつたとしても、一般人はそれをそのまま受け入

れるしかないのである。

「しかし物事には常識ってものがある。ロシア製の原潜ですら二〇〇〇メートルが限界だと聞くぞ」

「どうして我が国の潜水艦建造技術がロシアより劣っていると思うのですか？」

「そ、それはそうだが……」

「我が国の極超々高張力鋼NS1100（極超々高張力鋼NS1100）はそれほどに凄いのですよ。何しろ国家機密ですので」「極超々高張力鋼NS1100なんて聞いたことがない。ホントにあるのか？」

「ない。実在するのは、現段階では高張力鋼NS1100である。」

それに本当に凄いのは溶接作業員を含めた造船所スタッフの工作技術のほうだ。

海上自衛隊は、彼らの技能を維持、発展、継承させるために、毎年一隻の潜水艦を就航させていると言っても過言ではないほどだ。昭和三十五年初代『おやしお』就航以来、何十年も試行錯誤を積み重ねてたどり着いたこの境地は、他所よそから成功の果実を盗んで工業国となったと言いつ張るような成り上がり者には、決してたどり着くことは出来ないものなのである。

だが結局江田島は、真偽を口にすることなくしらばっくれた。

「秘密です。可潜深度の具体的な数字も秘密です。ですからもし何か記事に起こすようなことがありましたら私が一万メートル以上と答えたことを思い出してくださいね」

「それにしても一万かよ!? 世界で一番深いマリアナ海溝ですら深さが一万一〇〇〇くらいなんだ

ぞ!? 量産型の潜水艦がそんなだなんて、いくらなんでもありえないだろう!？」

江田島とチャンのやりとりを見て、それまで不安な顔をしていたアマレット達もポカンとしてしまった。交わされている会話の意味は解さなくとも、少なくともこうして言い合いをしている余裕があるということだけは彼女達にも伝わったらしい。

実を言うと百万言を費やした説明なんかより、こうしたくだけた雰囲気のほうが人間を安心させる力があったりする。人間の感情は、言葉の内容よりも人間の発する気配の影響を強く受けるからだ。その意味では江田島が生来持っている気配はどうやっても人をホッとさせるものではなかった。それがチャンのおかげでずいぶんと緩んだのである。

「統括もなかなかやる」

チャンが気付かぬ間に、科員食堂に設置された深度計にガムテープを貼って表示を隠す作業をしていた徳島は、チャンを煙に巻きつつ皆を安心させたことを、江田島の手腕だと勘違いしてニヤリと笑ったのだった。

さて、そんなプリメーラ達のもとに艦長の黒川が姿を現したのは、艦の傾きが解消され、沈んでいく感覚がなくなった後のことである。

その姿を見つけた徳島が告げた。

「統括、黒川艦長がおいでになりました」

「どうぞ座ったままでいてください」

黒川は、咄嗟に立ち上がろうとしたシユラやオー・ド・ヴィを手で制す。

オー・ド・ヴィは黒川の動作の意味を察して腰を下ろしたが、シユラはそれでも立ち上がって深々と頭を下げた。

「Tali ow xantina……」

特地語を解さない黒川のために、徳島が通訳を始める。

「艦長、乗組員の救助に感謝します。ボクはティナエ海軍所属オデット号艦長、シユラ・ノ・アチです」

「貴女が？」

江田島にそれは本当かと問いかける黒川。

江田島は軽く頷いて肯定する。すると黒川は目を瞬かせた。

どう見ても十代後半から二十代前半ぐらいの見かけなのに艦長という役職にあること、加えてその態度や言動がとてもしっかりしていることに驚かされたのだ。

制度の整っていない「遅れている」国には、いろいろな点で不合理なところがある。その一つとして、能力や責任感に欠ける人材に、見合わない地位と権限が与えられてしまうことが挙げられる。

もちろん日本でもコネや様々な事情でそういうことは起きる。相応しい人材を相応しいポストにそれこそがあらゆる意味で理想なのだが、なかなか実現できていない。これこそが人類の宿痾なの

だろう。

日本では、為政者は選挙、官僚と一般労働者は学歴と試験と年功序列、企業経営の責任者については弱肉強食の生存競争という方法で選別される。だが昨今の 대기업で度々起こるように、不適格な人材が人々の生活に影響を与える地位につき、多大な損害をもたらしているところを見ると、優れた人材をどのように育て、選び出すか、その見直しが必要かもしれない。

この特地では、政府の官職や軍の役職、階級はもとより、国によっては貴族の身分すらも金で売買できてしまう。黒川は、この少女もまた実力に見合わぬ地位を与えられた人物なのではないかと思っただけだ。

「乗組員のことを、くれぐれもお願いたします」

だが、そうではないことは態度の端々から感じられた。

このシユラという少女の五体に詰まっているのは義務を果たそうという使命感と責任感だ。経験や能力はともかくとして、それだけは本物だと理解できた。

海の漠というのは、この精神にもの凄く敏感でたちまち共感してしまう。だから黒川も自然と敬意を抱き、自分の娘よりも若いこの艦長を対等に扱うことにしたのである。

「いえ、我々のほうこそ謝らねばなりません。他の乗組員の方々をお救い出来なかったことをどうぞお許しください」

黒川は力が及ばなかったことを詫言びた。

「いえ、鯨と戦闘中である以上、いつまでもあの海域にとどまってはられないという事情は分かれます。分かっているんです」

シユラは分かっていると二度繰り返し返した。奥歯を噛みしめながら。その言葉が逆に、全く納得できていないことを言外に告げていた。

シユラはおそらく、もつとあの海域にとどまって生き残りがいないか丹念に探して欲しいと思っているのだ。ただ礼儀正しいから、そして自分が相手の立場ならばやはり同じようにすると理解できず、きつてしまうから、命の恩人に食ってかからないだけなのだ。

黒川はそれを感じとった。

しかし、言葉にされない要請ならば、分からないフリをすることが許される。

『きたしお』は鯨と戦闘中であり、選択肢は他にない。相手の懇請を冷たく振り払ったという負い目を背負わさないでくれる年若い艦長に黒川は感謝した。

「何にせよ皆様のことは私が承ります。どうぞご安心ください、艦長」

「ありがとうございます、艦長」

シユラとの会話を終えた黒川は、江田島と徳島を見て軽く頷いた。

次に若い女性二人、そして男性二人——少年と中年男——に視線を巡らせていく。

「江田島、こちらの男性が例の？」

黒川の視線が最後に捉えたのが中年男——華人系米国人を名乗るチャンだった。

「そうです。こちらがチャンさんです。チャンさん、こちらは海上自衛隊『きたしお』艦長の黒川一等海佐です」

チャンは座ったままぺこりと頭を下げ、癖のある英語で話し出した。

「救出を感謝するクロカワ艦長。しかし日本の自衛隊が特地に潜水艦を持ち込んでいるとは知らなかったな。それとも俺一人のために、わざわざこんなデカ物を持ち出してきたのか？ なら、いささか大仰ではないか？」

英語なら黒川も直接やりとり出来る。

「別に貴方のために持ち込んだ訳ではありませんよ、ミスター・チャン。この艦がたまたま特地の海に進出していたからこそ、貴方を救い出すことが出来たのは間違いありませんけどね」

黒川の言葉に江田島が補足する。

「でなければ、貴方はティナエ海軍の漕役奴隷とされて今頃は海の藻屑でした。そのことは貴方もティナエ海軍とシーラーフの艦隊がどうなったかをご覧になった以上、否定できないでしょう？」

「ああ、分かっている。だから感謝してるって言ってるだろ？ 礼も何度だって言うさ。だがこれだけは教えてくれ。これから俺をどうするつもりなんだ？」

「今回貴方を連れ帰る作戦は、合衆国政府の依頼に基づいています。なので赤坂の大使館までお送りいたします」

するとチャンは鼻を鳴らした。

「日本政府もまあ随分とサービスがよろしいことだな。しかし別にそこまでしてくれなくていい。行き先はそうだな——アルヌスまでいい。そこから先は自分で帰るから。俺も子供じゃないんだな」

しかし江田島は頭を振った。

「いいえ、そういう訳にはいきませんよ。引き受けた仕事は最後まできちつとこなすのが我々日本人のポリシーですので。それとも行き先はやっぱ赤坂ではなく元麻布がよろしいのですか？」

元麻布には中華人民共和国大使館がある。江田島は、チャンが帰りたいのはそっちのほうではないかと暗に尋ねているのだ。

「どっちも遠慮しておくぜ。ただあんたらの任務は俺の救出なんだろ？ それならもう成し遂げられていないんじゃないかと思ってるね。あんたらはもう役目を終えてるんだ」

すると江田島は、人の悪そうな笑みを浮かべて再度首を横に振った。

「いいえ、まだ終わっていません。貴方を担当者に引き渡すまでが我々の任務です」

「最近じゃあ、適当に手を抜いて自社製品の評判を落とす日本人も多いってのに、真面目な奴だなあ。そんな生き方で息が詰まらないか？」

「性分なので、特に気詰まりを感じたりはしませんよ。それに日本人といってもいろいろな人間がいますので、馬鹿をやらかす輩が時々いることも否定しません。彼らの多くは先人の積み上げた評判だけでやってきた苦労知らずの世代でしてねえ。我々の代が、そのツケの後始末をしなきゃなら

ない時期なんです」

「俺を大使館まで届けるのも、そのツケとやらを清算するための努力って訳か？」

「そういう風にご理解いただけると助かります。もちろん、それだけではありませんよ。こちらにも本音と建前つてものがありますので」

「俺の救出が建前なのか？ じゃあ本音はなんだ？」

「端的に申し上げれば、勝手に特地をうろつかれるのは迷惑だからとっとと出て行け、二度と来るな……ということですよ。それに合衆国政府に貴方を引き渡さないと、救出費用の請求も出来ませんしねえ」

身も蓋もない本音を開陳かいせんされて返す言葉もないチャンは、口をばくばくとさせつつも辛うじて一言発する。

「救出費用を取ろうってのか？」

「もちろんです。経費はしっかり請求させていただきますよ。この作戦には日本国民の血税が投じられていますからねえ」

「日本政府が善意でしていることじゃないのか？」

「まさか!? 確かに我が国は、気前よくお金をばらまき国際社会の財布なんて言われた時代もありましたが、今の日本にはそこまでの余裕はありません。それに対価は金銭とは限りません。物であつたり、情報であつたり、交渉の際の貸しとして機能するもので結構なんです。最終的に得られ

るものが、我々が費やした労力と釣り合うものであるならばね」

チャンは嘆息した。

「つまり俺は、世知辛い外交交渉の贅えいつて訳か……」

「ご自身の立場をご理解いただけただけで何よりです」

チャンが口をつぐむと、黒川の合図とともに腰に拳銃を提さげた警衛海曹が一步前に出た。

「ご納得いただけただけようですね。ではこれより、艦内での貴方の行動を制限させていただきます」

「なんでだ、艦長？」

「貴方はアメリカのジャーナリスト。そしてこの艦は我が国の機密の塊。是非、情報保全にご協力いただきたいのですよ」

「おいおい俺だけなのか？ 他の連中はどうなんだ？」

「どうやら行動制限されるのは自分だけだと理解したチャンは、科員食堂にいる他の特地人を見渡した。

「もちろん、留意しますよ。けれど他の方の母国はこの艦がどのくらい深く潜れるか知ったところでその情報を用いる機会はありません。そもそも、あちこちに表示される我々の文字や数字を読み取れるかどうかも怪しいです。しかしチャンさん、あなたは違う。その意味も価値も、十二分に理解しておいでだ」

「ちっ、しまった。アレが原因か」

この艦の可潜深度についてのやりとりを思い出したチャンは、観念して両手を上げた。

「飯はちゃんとした物を食わせてくれるんだな？ トイレやシャワーは？」

「もちろん他の方と同じようにさせていただけます。この措置は、あくまでも艦内を勝手にうろつくな、秘密を覗いて回るなどというだけのことです。基本的には、ここにいる皆さんと一緒にいていただくことになります」

「仕方ない。なら我慢してやるか」

そしてチャンは警衛海曹に付き従われる形でCPO室先任海曹室へ連れて行かれたのである。

以降チャンは、『きたしお』に乗っている限り、食事もトイレも常に警衛海曹の監視を受けることになる。何をするにも必ず傍に誰かが立っているのである。

チャンが科員食堂から立ち去るのを見送った黒川は、江田島を振り返った。

「おい、江田島。これでこの海域での任務は完了だな？」

「ええ、おしまいです」

「なら、取り急ぎこの海域から離れよう」

科員食堂を去る際、黒川は毛布を被っているピンクブロードの女性とその髪を拭いているメイドの女性を見やる。特にプリメーラやシュラの衣服が濡れたままなのが気になった。

「徳島二曹、彼女達の服をなんとかしてやれ。このままじゃ風邪を引きかねない。いいな？」

「了解」

こうして徳島は、彼女達の着替えをどう調達するかという問題を抱えることになった。  
「といっても、海士の服を借りてくるしかないけど」

プリメーラやシュラの二人には、いわゆるセーラー服を着てもらおうことになりそうだった。

\* \* \*

黒川艦長は、重々しい気分を駆られながら発令所に向かった。

シュラ艦長の言外の要求を無視したことについて、どうしても気が咎めたのだ。助けを待つ者がいるかもしれない。ならば助けたいと思うのは当然の感情だ。しかし今はまだ戦闘中。生き残ることに集中しなければならぬ。『きたしお』の艦長として、乗組員七十二名と員数外七名、そして新たに加わったシュラ達全員の生命を負っているのだから。

「艦長！ ソーナーが鰭進音聴知。S八九、九〇の二つ。感一。まっすぐ進んできます！」

発令所に入ったところで哨戒長が告げた。

やはり来たかという思いで黒川は頭を切り換える。

「距離と方角、深さは！」

『三〇八度、距離は約二万七〇〇〇ヤード。深さ二二〇〇。速度は一五ノット！ さらに増速中』

「シクヴァルは来たか？」

『シクヴァル』とは、鯨鯨の持つ長大な牙のことで、ロシア製兵器を連想させるという理由で乗員達からそう呼ばれている。

『まだです』

「さすがに遠過ぎるのでしょうか」

哨戒長の解釈に頷いた黒川は、背後の海図を覗き込むと数秒間考えた。さらなる深海へ逃げるべきか、それとも戦うべきか。

『S八九、S九〇、なおも近付く。深さ二二〇〇。速度二〇ノット！』

「敵を撃破する。配置につけ、魚雷戦よ〜い」

黒川は戦う決心を下した。

『配置につけ、魚雷戦用意！』

発令所からの命令が艦内全てに伝えられ、『きたしお』の乗組員達は当直、非番を問わず全員が配置についていった。

「艦長、配置よし」

哨戒長の報告が耳に入る。黒川は頷きながら発令所内を見渡した。

「S八九とS九〇は？」

『さらに近付く！ 距離一万二〇〇〇』

黒川は哨戒長に命じた。

「距離一万から回避運動、はじめ！」

「了解」

領いた哨戒長が、操舵手の木内海士長に少し近付き、命じた。

「取り舵二〇度！」

「取り舵二〇度、ヨーソーロー！」

操舵手が舵を左に切る。

すると『きたしお』が傾き、針路も三四〇度、三三五度、三三〇度と左に転じていった。そして鯨鯨を一旦真正面に捉えるも、そのままさらに左へと回頭していった。

それはシクヴァルを躲すための円運動である。

深度も潜航長が上下五〇メートルの範囲で絶えず変化させていた。こちらが位置を変えてさえいれば、長距離から狙いを定めることは難しくなるはずだ。

『S八九、S九〇、ともに深さ三〇〇。感二。変針、変速の兆候なし』

その間、目標の動きに変化がないことを水測員が報告してくる。

やがて発射管室より報告が上がる。

「一番発射はじめよし」

「二番発射はじめよし」

「次に撃つ！ 一番をS八九、二番をS九〇に合わせ」

黒川は魚雷発射を決断したことを告げる。そして針路の数値を睨みながら、回頭機動を続けて敵を再び正面に捉える時を待ったのである。

「的の評定終わり！」

発令所右舷側に並ぶ管制員が、目標へのデータ入力作業を進めている。

やがて左回りの旋回運動でぐるりと一周し、艦首が再びS八九、S九〇へと向かう。

「舵中央」

その瞬間、黒川が舵を戻すよう命じた。

潜水艦は魚雷を発射する際、直進している必要がある。そして魚雷が目標を捉えるまではそのまま進み続けなくてはならない。誘導のための細いワイヤーが艦と魚雷を繋いでおり、急な方向転換をすることでこれが切れてしまうためである。

もちろん魚雷にも敵を捉えるセンサーは装備されている。だからワイヤーが切れたとしても敵の追跡は続くのだが、潜水艦本体ほど優秀でないため、目標を見失ったり欺瞞されやすい。

従って必中を期するならば、出来る限り長く誘導して魚雷を敵に近付ける必要があるがあった。

だがそれはすなわち、『きたしお』本体も等速直進運動を続けることを意味する。巨大なシクヴァルを持つ鯨鯨にとってよい標的だ。

これを狙撃に例えるなら、敵に狙いを付けるため草むらから顔を出し、銃を構え続けている状況

だ。意識を一点に集中するため周りが見えない。攻撃の瞬間は最も無防備で狙われやすいのだ。

「ヨーソロー、舵中央」

操舵手が、舵が中央に戻ったことを告げた。『きたしお』はこれにより、しばし目標に向けて真つ直ぐ進む。

「発射用意。一番、二番、撃て！」

黒川の命令に従って水雷長すいかいがキーを操作する。

「セット、シユート、ファイヤー」

艦首側の発射管室から、圧搾空気あつそくの強烈な噴出音が響く。

『一番、二番、発射方位三〇六度、魚雷出た！』

水測員の報告が艦内に響く。

「誘導開始します」

「誘導はじめ、誘導間隔十秒」

黒川は歯を食い縛ると、睨むようにして水測員の報告と、発令所乗組員達の指示と報告に耳を澄ました。

『S八九、S九〇ともに変針、変速の兆候なし。感度上がる。感三かんさん！』

やがてモニターに、魚雷が目標を見つけたことを報せるマークが点灯した。

「ワイヤーカットします！」

「誘導とめ、ワイヤーカット！」

「発射管一番、二番、ワイヤーカット！」

その時を待っていたように黒川は命じた。

「哨戒長、回避運動を再開！」

「了解！ おもーかーじ！」

操舵手が指示を受け、今度は舵を大きく右に切る。すると艦が右に傾いていく。

そこで水測員が叫んだ。

『シクヴァル、左を通過！』

音速で進むシクヴァルの存在は、艦に命中するか、近傍を通り過ぎるかして初めて探知できる。

まさに間一髪であった。

『S九〇針路、変針します！』

「一番、二番、命中しますっ！」

同時に、猛烈な爆発音が海中を伝播して『きたしお』を揺すった。さらに大きな衝撃がもう一度起きる。

『目標方向に爆発音！』

やがて残響が消え海底は静まり返る。

しばらくの間、耳を澄ましてじっと聞き耳を立てていた水測員が告げる。

『目標消滅。S八九、S九〇ともに消滅！』

乗組員達は口を閉じたまま、拳を立て、あるいは腕を突き上げて喜びを表す。満面の笑みを浮かべながら隣の同僚の肩を叩く者もいる。

しかし艦長の黒川だけが静かに、考えるように黙り込んでいた。

「妙に手応えがなかったな」

黒川の呟きに、副長の八戸二佐が答えた。

「S八五に比べたら確かにあつけな過ぎました。ですが、S八五がとりわけ優秀な個体であったのかもしれませんが。単独で広大な縄張りを保有していたのですから、能力相応だったとも言えます」

「確かにそれで説明は可能だな……」

だがたどえそうだとしても簡単過ぎた気がする。何か詐術さじゆつにかけられたような悪い予感があった。そのため黒川は水測室に命じる。

「まだ鯨鯨がいるかもしれない。周囲への警戒を厳げんとなせ。どんな兆候も聞き漏らすな！ T A S Sを出せ」

『了解』

艦尾から曳航T A S Sソーナーが伸ばされていく。

こうして『きたしお』は、魚雷戦配置のまま静かにアヴィオン海を進んでいったのである。

T A S Sが完全に伸ばされた。これにより長いケーブルに数珠繋ぎに設置されたセンサーの力で、かなり遠くからやつてくる音も拾うことが可能となる。

「水測室、どうだ？」

『反応はありません』

怪しい気配はないと返す水測員の言葉を受け、敵を撃破したのだという油断めいた空気が乗組員達の間流れていった。

おやしお型潜水艦『きたしお』は海上自衛隊の誇る新鋭潜水艦である。

A I P（非大気依存推進）機関を搭載した『そうりゆう』型が登場し、さらにはリチウム電池搭載型建造計画も進むため、型式としては最も古いものとなっている。

しかし海上自衛隊の潜水艦の更新速度は、他国と比べても著しく速い。

前述したように一年に一隻ずつ新鋭艦が造られるため、その都度定数から押し出されて一隻ずつ退役していく。つまり古くて役に立たないからではなく、ただ定数を超えるという理由で、他国では十分に最新鋭・現役としての扱いを受ける艦齢にもかかわらず、除籍されていくのである。

それだけに、『きたしお』の各種センサーは十分に優秀であった。

新しい機械に付きものの不具合は、バージョンアップによつて全て解消されている。その意味では、まだ顕在化していない欠点を抱える可能性のある最新鋭艦よりも、かえつて優秀と言える。

しかも指揮官の黒川をはじめとする乗組員達は経験を積んだベテランばかりで、『きたしお』の長所も短所も全て把握している。目を瞑つていても、艦内のどこに何があるのかが分かるほどだ。しかしそんな『きたしお』でも、海中という特殊な環境による問題を克服することは出来ない。潜水艦において外の様子を知る方法は、音や磁気の探知以外にないからだ。

海底は無音の世界ではない。水の流れ、地殻の変動、さまざまな雑音が充滿している。そこから目標の音だけを抽出するのが水測員の役割なのだが、そんな彼らでも海底にぴたと張り付き、息を凝らしている目標を探知することは困難だった。

ましてや相手が磁気に反応しない生物ならばなおさらだ。

そのため『きたしお』は、深さ六〇〇メートルの海底に張り付いていた鎧鯨S八九に気付くことが出来なかつたのだ。

『きたしお』の放つた二本の魚雷は、S八九、S九〇それぞれに向かって正確に突き進んだ。しかしS九〇がS八九を庇うように針路を変更したことで、二本の魚雷はS九〇に直撃した。

S八九はS九〇が被弾している間に静かに潜航して海底に張り付き、『きたしお』が近くに寄つてくる瞬間をじつと待っていたのである。

その計画は、『きたしお』が僅かでも針路を変更したら無意味になってしまう。だが鎧鯨は海の王者の本能に全てを託して待ち続けた。復讐の時が来るのを、じつと、じつと、息を凝らして待つたのである。そして――

ロンデル標準時<sup>ふたさんひとよん</sup>二二三二四時――

その時が来た。

『真下です！ 真下から鎧鯨が浮き上がってくるっ！ S八九です！』  
最初にその存在を感知したのは、水測室の松橋二曹であった。

黒川はその声を聞いた瞬間に命じた。

「面舵いっぱい！」

操舵手は、反射神経の及ぶ限りの速度で舵を右に切った。

「面舵いっぱい、ヨーソーロー！」

だが、微速で進んでいた『きたしお』は敵の突撃を咄嗟に躲<sup>びんしやう</sup>せるほど敏捷には動けなかつた。次の瞬間、真下から突き上げるような凄まじい衝撃が起こる。

「うわっ！」

「っ、つかまれ！」

『きたしお』の艦体は激しく揺すられ、鎧鯨が激突した艦尾部分にいたっては床にあつたものが天

井に届くほどだった。乗組員達の何人かは天井に頭をぶつけてしまった。

「ぐはっ！」

そしてそのまま落下し、再び床に叩き付けられる。

彼らは二度の衝撃に悶え、呻いた。

打ち所が悪くて気を失う者までいた。その一人が機関室に居た機関長の舞鶴三佐だった。

「き、機関長！」

『きたしお』にとつての不幸はさらに続く。

艦尾から曳航していたTASSのケーブルが、海面に向かって真っ直ぐ上昇する鰐鯨の体躯の凹凸や突起に絡みつく。これによって『きたしお』艦尾が大きく持ち上げられ、艦首を海底に向けた姿勢で釣り上げられてしまったのである。

艦内は大混乱に陥った。

横に置かれていた筒が直立し、床であったものが壁と化し、それまで隔壁であったものが甲板となる。固定されていないかった全ての物が、そして乗組員達が、重力によって下方へと引っ張られていく。

「うわわわわ！」

問題はそれぞれが立っていた場所、置かれていた位置によって、下までの落差が四メートルにも五メートルにもなってしまったことだった。

乗組員達の多くは最初の衝撃で艦内各所の突起物やパイプ類に辛うじてしがみつき、この倒立にも耐えることが出来た。

「た、助けてくれ！」

だが、全員が無事だった訳ではない。

咄嗟の動作が遅れた者、一度目の衝撃で既に体力や意識を失っていた者、そして同僚を救おうと手を離していた者などがあちこちで身体を強打し、艦内で負傷者が続出したのである。

医務室となっていた士官食堂では、この倒立の衝撃で治療用の道具類が散らばった。

治療台からオデットの腕がだらりと垂れる。

台に縛り付けられていたため彼女が床に投げ出されることはなかったが、医官の湊や衛生員はもうもいかない。あちこちに頭をぶつけた揚げ句、士官食堂前方へと落下して壁面に激突した。

「ぐふっ！」

湊は思わず叫んだ。

「艦がひっくり返りそうになる時は言えって言ったろ!？」

「こんな予測できる訳ないっすよ！」

頭上に降り注ぐ手術器具。二人は頭を抱えて身を庇いながら、そう叫ぶことしか出来なかった。

士官食堂の真下にある科員食堂でもこれと同じことが起こっていた。

しかも空間が広く、様々な備品が置かれ、更にそこにいた人数が多かったことがより災難の度合いを高めた。

「うわっ！」

「きゃあ！」

「ひい」

シュラやオー・ド・ヴィは咄嗟にテーブルにしがみついたが、プリメーラとアマレットは間に合わず傾斜とともに前方に滑り落ちていく。

そして二人はアクアス達とテーブルを囲んでいた徳島にぶつかった。

徳島はケミイ達を庇いながら、二人も支えようとして懸命に踏ん張る。しかし抗あうがいきれず、三人ひと塊りとなってアクアス達とともに前方隔壁に転がっていった。

これに追い打ちをかけるように、床に固定した椅子の中に格納されていたじゃが芋やら玉ねぎやらがどどん降り注ぎ、散らばっていく。

「いたたた、痛い痛い」

じゃが芋であっても高いところから降ってくれば地味に痛い。

ケミイ達は頭を抱えながら悲鳴を上げている。

しかし徳島はじゃが芋で済んで幸いだと思っていた。

これが調理場で汁物でも作っている最中だったら、熱湯が降り注いできたかもしれない。あるいは包丁などの鋭利な調理器具だったかもしれない。そう考えて徳島は一人ぞつとするとともに、降ってきたのがじゃが芋だったことに安堵したのだった。

「徳島君、無事ですか？」

「う……くっ」

落ちるべきものが全て落ち、転がるべきものが全て転がると、艦内の騒ぎも落ち着いてくる。

「徳島君!？」

「と、統括!？」

徳島が頭上を見上げると、江田島がテーブルにしがみついてこちらを心配そうに見ていた。

どうやら艦は艦首を下に倒立したまま安定してしまっただけ。もともと床に固定してあったテーブルは、今や壁の上方に張り付いているように見える。江田島はシュラやオー・ド・ヴィとともにそれを掴んでこちらを見下ろしていた。

「プリム！ アマレット！ 無事かい!？」

江田島の背後から、シュラが呼びかける。

二人は徳島をクッションにして、うつ伏せに倒れている。倒れ込む時に徳島が咄嗟に庇ったので、頭などは打っていないはずだった。

「大丈夫ですか？」

徳島は二人に声を掛けた。

「え、あ！……はい」

するとプリメーラは、自分が誰にのしかかっているのかに気付き、飛び跳ねるような勢いで後ずさる。それを見た徳島は、自分は心底嫌われているのだと悟った。

いささか傷ついたが、それも仕方がないことである。彼女が親友と呼んで慕うオデットを傷つけたのは、確かに自分なのだから。

徳島は気を取り直すと、次にケミイ達アクアスを見渡した。皆目を回して横たわり、魚のごった煮を作ろうとしている鍋の底のような有り様だったが、何とか無事のようだ。

「みんな無事です。お二人も無事ですよ」

徳島は皆の様子を上司に報告した。

「怪我人はいようです」

「ならば結構。徳島君、我々はすぐに発令所に参りますよ！」

「はい？」

「科員食堂がこの有り様なんです。あそこはもっと酷いことになっているはずです。急いで行かなくては！」

江田島はそう言ってテーブルから降り始めた。

続いてシュラとオー・ド・ヴィもその後ろに続き、鍋底のごとき隔壁に降りてきた。

「副長、ボク達は何をすればいい？」

「シュラ艦長とオー・ド・ヴィさんはこの場に残ってください。艦の姿勢が元に戻る時にきつとまた大騒ぎになるでしょう。その時にプリメーラさんと、アマレットさんをお願いします。アクアスの皆さんもこの場に待機で。いいですね？」

徳島はシュラとオー・ド・ヴィの二人に、プリメーラ達を託した。そして江田島とともに艦首方向へ向かったのであった。

徳島と江田島は、長い縦穴と化した艦内を艦首に向かって降っていった。

艦内に縦横に走る配管に掴まり、ぶら下がり、あちこちの突起や梯子段に足をかけながら降りていく。そして隔壁の縁に腰を下ろし、発令所の入り口から下を覗き込んだ。

「これは不味いですね」

中を覗いた江田島が舌打ちした。

発令所の底となった艦橋のハッチ、操舵席、そしてその周辺の隔壁に幹部や乗組員達が折り重なるようにして倒れている。

黒川艦長の姿もその中に混ざっていた。

江田島は深度計の数字に目をやる。

艦がこんな姿勢のままだから海底に向かって沈んでいるのかと思いきや、深度を示す数字は何故か減っている。つまり『きたしお』は浮き上がっているのだ。

「これは……はっ、そういうことか。徳島君、急ぎましょう！」

「は、はい」

徳島は、まず海図室に降りた。

海図台の縁に手をかけ、ぶら下がるようにして二番潜望鏡に慎重に足を下ろす。そしてさらに下にある一番潜望鏡へ降りていった。

だが、そこから下はもう足の踏み場もなかった。

哨戒長、哨戒長付、潜航長、左右の管制員、IC員、そして艦長、さらに海図室にいた副長らがびっしりと倒れていた。

最も酷い状態なのは、操舵席の木内海士長だった。管制員達が彼の背後から伸しかかるように折り重なっている。

「お、おい、返事しろ！」

「うう……」

徳島が声をかけると辛うじて呻き声が聞こえた。

続いて降りてきた江田島が、仕方がないとばかりに皆が折り重なる隙間に足を下ろそうとする。しかしうっかり黒川艦長の太腿を踏んづけてしまった。

「痛っ、だ、誰だ！」

江田島はちようどよいとそのまま黒川艦長を揺すり起こした。

「黒川艦長、私です。起きてください、起きてください！」

「え、江田島か？ くっ……」

黒川の顔が苦痛に歪む。

「しっかりしてください、艦長！」

江田島は自分の手が真っ赤になっていることに気付いた。

落下の際、黒川は頭部をどこかにぶつけたのだろう。頭皮が裂けて血が滲み出していた。

「え、江田島……『きたしお』はどうなっている？」

「艦尾を上にも倒立しています。そして海面に向かって上昇しています」

答えながら江田島はハンカチを取り出し黒川の頭部に巻いた。

「と、倒立だと？ それでいて浮き上がると言うのか？」

「おそらくTASSが鯨に引つかかっているのでしょう。このままでは『きたしお』は釣り上げられてしまいます。あるいは奴は、浅い深度にまで我々を引き上げて、そこで仕留めるつもりなのかもしれません」

「くそっ、誰か！ 動ける幹部はいるか!? 誰か、誰か返事をしろ！ 副長、艦の指揮をとれ！ 機関長！ 船務長！」

江田島は念のため周囲を見渡してから告げた。

「いえ、今ここで動けるのは、私と徳島二曹だけです。この有り様ですから、他の部署の幹部が駆けつけて来るまで時間がどれほどかかるかも分かりません……」

「そ、操舵員はどうか？」

その話の合間にも、徳島は操舵手の上に折り重なっている管制員を一人ずつ剥がし、横に転がしていた。そうして操舵手の救出に成功したのだが、徳島は頭を振った。

「木内の意識は、ありません」

「まさか、し……!?」

「いえ」

徳島は頸動脈に指を当て、脈の有無を確かめた。

「心拍や息はありません。大丈夫です。生きてます」

「よ、よかった……だが、仕方ない。舵は徳島二曹がとれ。江田島、艦の指揮はお前に託すしかないようだ、お前ならこの状況でもなんとか……」

だが艦長の黒川は、そこまで告げて意識を失った。

「艦長！ 艦長!!」

江田島は黒川がまだ生きていることを確認すると、彼の頭部を壊れ物のようにそつと横たわらせたのであった。

江田島と徳島は黒川の意識が途切れると互いに顔を見合わせた。そして間髪容れずに江田島が命じる。

「徳島君、横舵、下げ舵いっぱいです」

「下げ舵いっぱい、ヨーソロー！」

徳島は操舵席につくと、舵を床に押し込むようにして下げる。

操作が逆のように思えるが、艦は今逆立ちして浮き上がっている。つまり後進しているので、下げ舵にすることで艦首が上がると考えたのだ。

すると横舵の舵角を示す針が下がっていく。そして二五度を超えて振り切れた。

「ヨーソロー、下げ舵いっぱい！」

しかし艦体の傾きは少しも和らぐことはない。

「統括、深さ一〇〇を切りました。九五、九〇……」

「徳島君、前進原速！」

そこで江田島は前進を命じた。

「は、はい」

徳島がレバーを押して前進をかける。

舵を上げてもびくりともしないのは、浮き上がる鯨の力に負けているからだ。ならばまずは下

方に沈もうとする力で鯨鯨に対抗すればいい。江田島はそう考えていた。

現代の船の出力調整は、回転数を上げるのではなくプロペラピッチを変えることで行う。回転速度は同じままピッチを深くとることで推力が増大するのだ。

案の定、ガツンという衝撃とともに深度の表示の変わり方——つまり浮き上がる速さが目に見えて遅くなった。

ギンギンとワイヤーが軋む音がする。

浮かび上がるとうする鯨鯨の力と、海に潜ろうとする『きたしお』の力とが拮抗きっこうしているのだろう。

「徳島君、前進第一戦速！ 横舵中央」

「前進第一戦速、横舵中央ヨーソロー！」

そのまま鯨鯨と力任せの引つ張り合いになった。

「前進第二戦速！」

「前進第二戦速、ヨーソロー！」

徳島がさらに速度を上げると今度は艦がゆっくり沈み始める。ようやく力で勝り始めたのだ。しかしそれも長くは続かない。

「うわっ」

衝撃とともに艦内のあちこちで悲鳴と呻き声が上がる。

ガクンという衝撃と墜落感が『きたしお』の艦体を揺らした。それに伴い深度計の表示が急激に増していく。その速度は落下を思わせる勢이었다。

艦の重さとプロペラが生み出す推進力で、艦は海底に向かって直進しているのだ。凄まじい勢いで水圧が増し、艦体を容赦なく締め付ける。金属の軋む音が鳴り響いた。

「と、統括、落ちてます！」

「TASSのケーブルが引き千切れたんでしょう！ 徳島君、このまま進んでください！」

「は、はいっ！ 横舵上げ舵いっぱい！」

「違います！ 横舵中央のままっ！」

「お、横舵中央!? ヨ、ヨーソロー!!」  
江田島の奴は一体何を考えているんだ、と徳島は思った。このまま真っ直ぐ進めば海底に突き刺さってしまう。

しかし徳島には江田島に逆らうという発想はない。これまで江田島がしてきたことには常に何らかの理由があり、大抵はうまくいった。だからそれを信じる以外ないのである。

徳島はちらりと深度の表示に目を走らせた。数字はどんどん増えている。

「三二〇、三四〇、三六〇！ 統括、鍋がそろそろ噴きこぼれそうです！」

江田島は必ず上げ舵の指示を出す。それがいつであつても対応できるよう徳島はしっかりと舵を握って身構えた。鍋が噴きこぼれるというのは、早く命じて欲しいという彼独特の催促だった。

立ち読みサンプル  
はここまで

「まだです。徳島君、まだですよ！」  
だが江田島は耐えるよう命じた。

「了解。でも、どうして？」

「貴方は感じませんか？ 背筋が寒くなるようなこの殺気を。『きたしお』のすぐ後ろから鎧鯨が迫ってきてるんです。このまま艦首を上げたりしたら、体当たりしてきた奴に海底まで叩きつけられてしまいます！」

「そ、それじゃあ!？」

「そうです。鎧鯨の奴と我慢比べです！ 徳島君、前進いっぱい！」

「ぜ、前進いっぱいヨーンロー！」

江田島が言ったように、『きたしお』の背後には鎧鯨S八九の姿があった。だが『きたしお』はさらに加速して鎧鯨を引き離しにかかった。

すると艦内のあちこちのパイプから海水が噴出し始めた。

鎧鯨の体当たりを食らってダメージを負ったせいだろう。普段なら大丈夫なはずの深度でも漏水が始まったのだ。

「統括、各所で漏水！」

「大丈夫！ この程度でお漏らししてしまうのはこの娘（艦）のいけない癖です。でも大丈夫、きっとやれます！」

艦内の各所では、パイプにぶら下がっていた乗組員達が必死に噴出を止めようとしている。

そして深度計を睨んでいた江田島が、ようやく叫んだ。

「五二〇、五四〇、五五八〇ー」

「今です！ 横舵上げ舵いっぱい！」

「上げ舵いっぱい、ヨーンロー」

この時を待っていた徳島が、舵をぐいっと引いて叫んだ。

「うおお、もどれー」

すると横舵が利いて艦首が急速に上がっていく。

「ヨーンロー、上げ舵いっぱい！」

『きたしお』の艦首がさらに持ち上がり、床と壁がそれぞれ甲板と隔壁の役割を取り戻していく。

隔壁に落ちていた物品が次々と甲板に転げ落ちていった。発令所の幹部達も、再び床へと投げ出

されて呻き声を上げた。

艦の傾きは一気に回復していく。しかしながら海底はすぐそこ。このまま『きたしお』の艦首は海底に激突してしまうかと思われた。そしてすぐ後ろには鎧鯨が迫っている。

「ダウン二〇、ダウン一五、ダウン一〇……」

そこでついに、『きたしお』は水平を取り戻した。

「横舵中央！ 停止！」